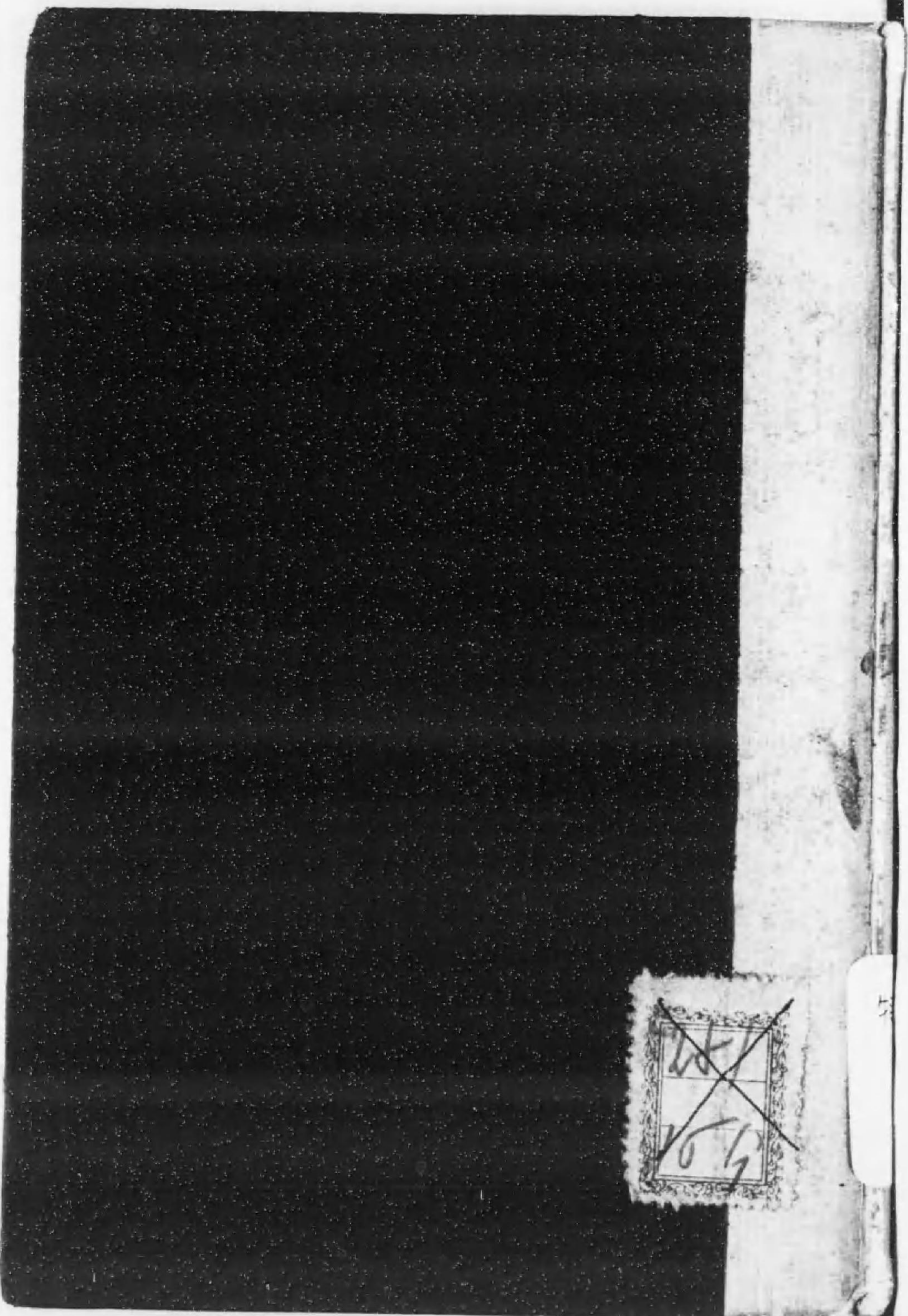
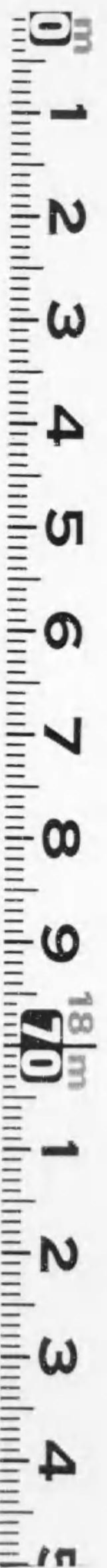


始



特109
523



ら
ひ
仁科愛村詩集





詩集 さすらひ

出版について一言す。

私は、こゝに移民にさすらひ得た詩らしいものを集めて出版する。

しかし、前の春の雪と一般私が、一旦日本行を思ひ立つて止してからのいきさつと、心のさまを永久に保たふとしてであつて、世に示さんとではない。

くるしい淋しい荒みつゝある自分の生活の、また、真に深みつゝあることも思はれるから、私も安定に入ることも

可能ると自惚かしらないが、信じてゐる。
あほかたは、この集をうかどふならばそれが分明するだ
らうと思つてゐる。

創作の月日順に編んでおく。

大正七年五月

在米 仁科 雄一

目次

シヤトルの詩、ポートルランドの唄(八篇)

さ迷ひ——焔——更生のおもひに——くるし
み——生殖を讃へる唄——自らの人種になげ
く——歩みに歩む——自嘲の小唄

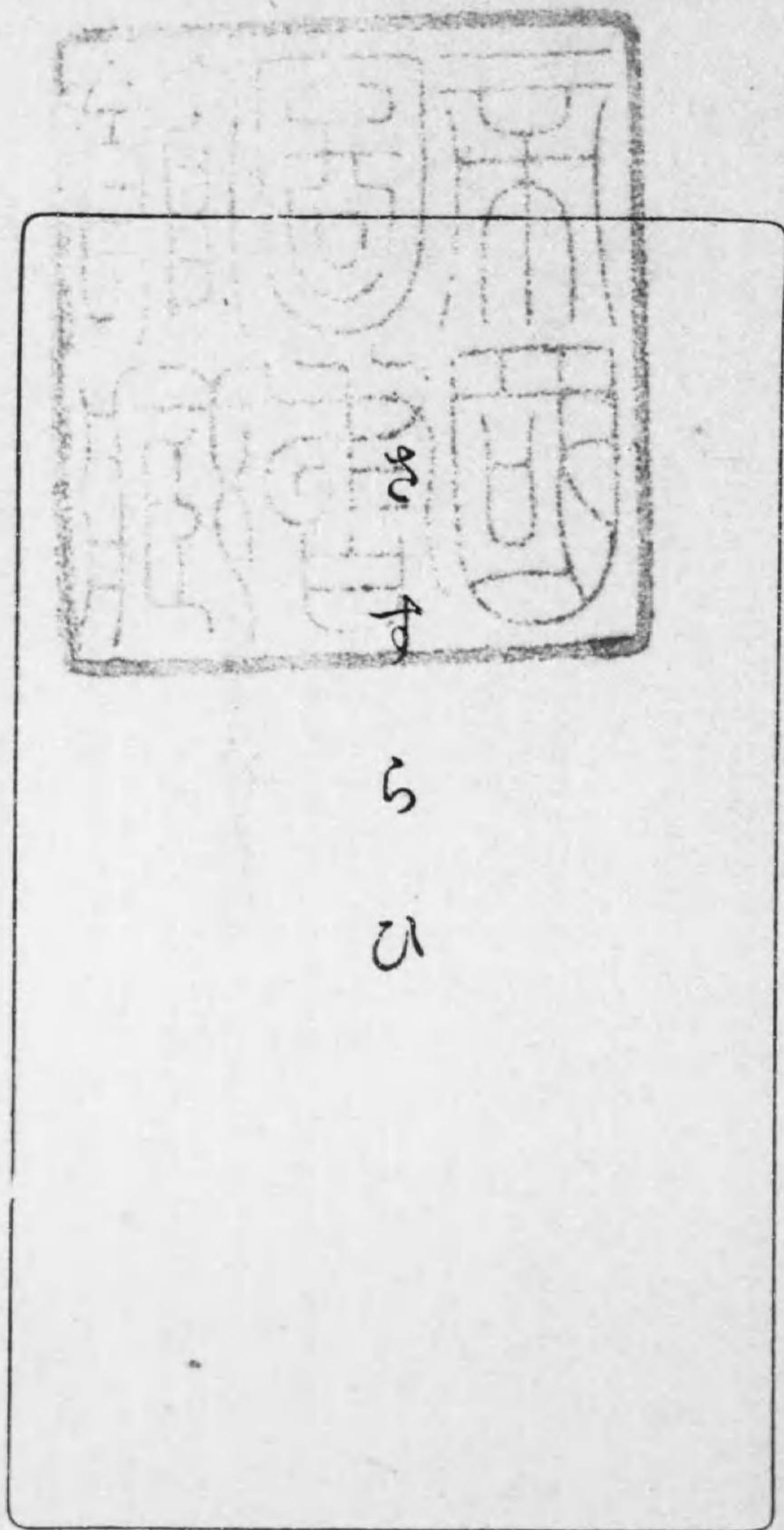
鐵道工夫の唄(十二篇)

幻の島——夢幻に遊ぶ——雨のけぶるうちに

働いて——純心——小唄——こひ現実——寒
い朝手袋もなく——私の生活——寒冷のうち
に吹かれながら——小唄——彼女さすらふ私
のたましひ

久遠の生(三篇)

春の雪——つめたい雨が今日もふる——過去
自嘲



一、シヤトルの詩、ポートルランドの
唄。(八篇)

(1) さ 迷 び。

「留坐」のおもひ。

「趨行」のさきにて大手をひろげふさぐる。

そこにさまよふ私、

はるばると、はるばると——

さすらひにくるる私の腑甲斐なさ。また、めでたさ！

あゝ「無」は天地の則よ！

虚無は渾ての時空に存在する彼ら一切に歸決をあたふ。

虚無よ！

あゝ虚無よ！

苦惱につかるゝ私には、

五欲煩惱にさいなまざるゝ私には

また、神の聖もある。

あのジュール、ドウ、ゴンクールがその日記に書いたといふ
『わたしは陰気な物質主義者である。わたしは自分のうちに、
十八世紀の修道院長のやうなあるものと、イタリヤの十六世
紀の残忍な氣質……』

と、

この氣質に

私はさ迷ひと、苦しみをみる。私自分に於て。

あゝわが敬慕するゴンクール兄弟よ、

別して不遇なりし弟のジュールよ！

……おんみに宵る。

……後生の異國の兒。私は――

あゝ私は……

ああ……言葉もなく心に唄ひ、君にささぐ……

(2) 焔。

何んのことだい！

さういふ野卑な聲をきく

心の奥に、

胸のなかに、

腹のなかに、

そして眼玉がほろくといふ。

何んといふつまらないおまへだ！

それといふ聲はないやうに、

私は思ふに、

からだ全體、

心の全てが言つてゐる。

この私は、

なにかもすべて一切に

他にも、自個にも盲ひて、

たゞ愛を――

愛とかいふものを欲りす。(或は思ふ)

頭の頂上てうべんからつまざきまで――疼く。

それに、

焰は渦巻き狂ふ。

ほんとに焰があるばかり――これこそしつかりしてゐる。

おゝ白炎うづまく焔!

(3) 更生のおもひに。

さびた色に

死にかゝつてゐた私は、

青い緑りのいのちをみそめてやつと更生のおもひに、
むら／＼と、

(4) くるしみ。

いたきころ

さいなまされ、さいなみあるころ

氣まづい思ひ、

愧はぢらふころ、

そこに、

愚かさあり。

哀れ弱さくるしみ、なげき。

いたみそこなふ身ところ……

(5) 生殖を讃へる唄。

人々のなげく

文明のみじめと、かけたるは、

おゝ文明そのものにあるになし。

そは、

みじめと、かけるは、

人々の生れ殖ふるによる。

あはれ、……

いしくもはげし

生殖のちから――

渾^{すま}ての

努力の果は、

はた、努力を強うるは

このいみじきちからあればなり。

そこに、

文明の創造^{つくら}るれ、

この生殖のいのちの
しげく、はげしかるぞよき。

おゝ！

偉大なり。嚴なり。

おゝ、

聖くも尊し、

そのいのちの力に

このくさくの
生きの煩悶は、

今世を苦界とはいはるべかり、

この生殖の力による生きのなやみなればに――

言はまし、

創造の力といのちはこれ生殖によるところからくる。
現代の凡ては、

いや、過去、現在、未来を通して、

この生殖の力といのちは凡てに勝てる。勝つ。

文明の悪をみるな！

また、悪をよくみよ！

そこに、

文明は生れ、

文明は亡ぶる……。

(6) 自らの人種になげく。

歩める。しほくと。

いまの淋しいあしどりは、

あゝ、このみなりのいやしさに、

また、これは……

……あゝ、われは黄な肌もつひと。

いざたないころも

淋しい黄色人種の私も

はじめは、

しやくくと、こつくと、

勇みてゆきしに、

あでに、

絹すれの音して、

白婦女の瞳は生きくとした色、

色美しく胸上半をあらはに、

あゝそれにみいりてよりは、

力なく、

仄々と淋しみの色さしき。

しほくに。

はぢかひながら、また、

なげきつゝしほくに歩める……。

(7) 歩みに歩む。

心、空なり。

歩みははかられず

歩む、いゆく……

うつとりに

シアトル市にさまよふ私は。

美しの、ひとに

いみじきひとに、

眼さむるばかりの店々

高さ、また高さ建物——に、

レンガ、コンクリート、イシ、くさぐさのたてものに、おちるい

いやしわれは。

歩みに、歩めど果なく、

足は痛めど、心空なり……。

(8) 自嘲の小唄。

働くこと、

それより外ない人間。

それもいちづに金のせいのみ——

私はそこにみいりては、

どうしても遁れなくなるものに、

あれ、移民出稼ぎらが群のみじめさより——

さるに、いま、またもぐりこまねばならなくなつたとは。

おとなつたとは……。

あゝ、私はさすらひのひと、はたらきうどに……

二、鐵道工夫の唄(十二篇)

(1) 幻の島。

夢のくに

幻の島に

妙なる心のさまよひし

忘我にうつとりと、

眠りに――

彼は、

天心にかゝる陽のもとに、

――されどそは想像のみ

曇り蔽はるゝ日なれば――

うとましく

いとはしく

またとろり／＼はたらきあし。

何のたわけぞ、

何の戯れか

幻に現の身を捨て

夢のくにへさ迷ふく。

あはれ、

なげきくるしみ

やかるゝつひは來む。

そこに

また、濃く深くとどろかれし夢のくにのドワーは開かれん。
いそしみ、

いそしむは幻の島

夢のくに

現なに……

(2) 夢幻に遊ぶ。

そこに、

彼は狂ひ、迷ひてあるらし

仄かに

灯火のあかりは

彼をさすまひにいざなふらし、
さまよひの歩みをきく——。

つかれ、いためる彼が

いかに、

夜のそこに逍遙ひあるくぞ！

焦燥に

焔に

狂舞するあはれよ！

この情熱のたわけ、

その身にも、

純に稚児が芽は萌し、ち、萌し、は枯れたまゝにあり。いま

は——

くちづけすれ、

いだくなれ、

彼のかひなは、夜の靈にいだかれてある。

そして、

淫樂の肉聲に

涙をすゝり

仄暗みに微笑む甘酒の酔よひに
とろく、

夜の靈にすてられた。

恍惚ときく

夢のくくにさまよひて、

おゝ刹那の悦び――

はかなし、あはれ夢まぼろし。……

(3) 雨のけふるうちに働いて。

空はひくく池の上におりた。

そこで、

池は自分の白く濁つた水面に空の灰色を喰ふてゐる。
ながくく

池に浮く木ぎれに止まりてゐる――ひとつの鳥。

それらに、

をりくみいり、

灰色にうづく頭を――

私は低くく沈んでゆくころ地に
淋しくも

すねたごと働いてゐる。

グリーキ、イタリヤン、スエーデンなどの移民らと
言葉の分らない私は、

鐵道工夫としてまぢつてゐる――

夢に眼を、

まだみてゐるつかれ、また懶い私は、

ホーマンには、

怒鳴られ。

人々には嘲嗤れ

己惚のみは、

どんなにかはぢかひはきびし……。

しほく／＼に雨はふる。

私の心に胸に雫は倦ものうい——。

悠々と、空にゆく水鳥に

空想を、

そこに、かのひとつの鳥が翹も、灰色に、

けぶる。天と、池のなかに消えた。

とう／＼木片からたつた——。

山はくすぶるいぶし銀色

池は油煙の白けるごと、

煤煙の白ける空の頭痛にないてゐる。

空にふる。雫は、

胸に溜まる。たまる。

手袋もない

素手には、砂に、どろに、

持つシャベルのハンドルにすれ砂切れる、いたさ。

貧しいなりはひ

さう思ひながらも、

私はつとめて文藝に生命をみいで、
そこに、

かすかながらほんとの生活がしたい。

かなしい表現の生活――

あはれ、

いまは愚かにも、

只のはたらきうど。

若いはたらきうどの周囲には、雨はふる。

いぶしぎんは鈍色をちらかし、

池と、天のなやみの灰色の集まるつゝみにしける、

鐵道の、

くろくと、また、

ぎんのいろにひかりて

長く、直線にのび

くるつと、廻りくぬる蛇の怖えは

うすぎみ悪く追つてくる。

なやみのいろは、

冬のいろ。灰色はなやみのいろ。

私のまどひのいろ。

雨はふる。

しづくは胸に汚くたまる。

(4) 純心。

列車がどうく走つてゐる。

白い日光は

とびたち、浮きたつ心に仄温み、

また列車をつしむ。

恍惚と、

東へ、東へと走る列車に見とれる。

私は、

東の、東の遠いあなたの大きな都みやこに

私のだいそれた思を誇つてみてゐる。

— 忍ばせて。

心持よい日和の

あゝ今日は、

永いながいあひだの陰鬱から
降りつゞいた冬からのがれた。

と、いつたふうな心持して
のことと。

あのなつかしい、愛の、

大きないのちを與へられる陽が拜をがまれたのだつた。

私は、

小兒の夢に現を遊んでゐる如うに

恍惚りと、

東へ、東へと走る列車にながめいつた。

ほんとに心持よい日和。

赤ん坊のやうな私、

少年の心の私である。なつかしい列車のけむりよ！

(5) 水 唄。

淋しい心に、

花はさいた。

ふるふ心に、

花は散つてゐる。

そこに、青葉は笑つて生きくくと、大きくなつてゐる……。
大きくなつてゐる葉よ！

(6) こひ現実。

アメリカの婦人は

妙齡のものより、

年増が美しうも女の氣高さがみえる。

それに、

髪も炎立ちにやかれてゐる。やかれてゐる——

何といつても

性慾は偉くあつた。

仄暗いさざりこむ街路のすゑに、

二十七八の女に、

四十前の男に、

恍惚に、

性慾の煽に渦巻かれながら、

羞恥の笑みに、

肉聲の美さを――

あゝそこをひとりみの若い私は通りかゝつた。

ほんとにやるせなう聞かされた。

あの陶然とした女の面に、

あの小兒の如うに無邪氣さにみえた男の面に――

性慾の心は

いぢらし、

尊し、

あゝ肉慾の愉樂に溺れ、

小鳥の如く

放恣に、

自由に、

そら翔けるひとくくのたわけは
なんといふ人生の美しさたのしさ、
またなんといふ力であるか。

あゝ想像する私は

息、せきくくに

あの快楽を思ふ。

熱い／＼焔の唇に

きつらキツスする

そのとき、あゝ恍惚のまなざしをいまみる。

あの仄暗い場末の街路に

若さを、

あゝ常若^{とこわか}を誇る

年増盛りのふたりこそ、

おゝ人生のいのち。

私は

惱しう肉慾のおもひにいたむ。

あはれ、

尊し、

聖し、

ほんとの戀の力といのちの愉悅よ！。

(7) 寒い朝手袋もなく。

つめたい。

凍る。

手袋もはめない私は

レールを積んで押してゆく車の上に

赤く疼いてゐる手——。

顔のいろも

赤く、青く……

青く、赤く……

赤から……青、青に……

くるめいて倒れさうだつた。

くわつと、

頭の頂上てっぺんが眩暈に眩つた。

それは、それはつめたい朝だつた。

私は、

手袋が買えないで、はめることが出来なかつた。

さびしい工夫の若い私であるものに、

あゝその若さにも、

貧しい卑しいみには、

力と美は死んでゐる——

汽車にやられるといふ

ひとまりめに、

いのちがやられるといふ

陰府に沈んでゆくといふことが、

面白いやうにねがはしい。

『あゝ……つめた！』

私はつめたいとは云はないと思つてゐたが、
とう／＼、やりきれないでうなつた。
しかし、その聲はなさげなくも低くかつた。

私は、

二度までも強いられて、

Nといふ四十男に

手袋を恵ぐんでもらつた。

みにくうも、いやしうも羞しい心をあらはに

體裁をつくつて

ごまかしの言葉に――。

赤い淋しい心が、

私を責める。

赤い無邪氣な心がいかりたつた。

それだといつても

つめたく凍る寒さは酷い。

ほんとにめまいがしたほどだった寒さだったもの——。

(8) 私の生活

腹を痛め、

きりくるとにがる……

便所に度々いく。

それでも働いた。

重い靴をふなれな足に穿いて——

淋しくなる。

虚無を思ふ。

働いて生きてゆく、

たいそれだけである。

一生を生きてゆくために——

いや、

只のパンのせいに——

ブレードに

小豆のあんをつけ
肉の小さいきれに
さむしい珈琲を飲んで、
それで働いて金を儲けてゐる
私たち
移民の鐵道に働けるはかなしい。
生き甲斐もない。
と、愚痴しながら
まめくくと。

働くは、
おゝ稼ぐ人々は偉大である。

さみしい人びと！

○ ○ ○

文よみ、

文かき、

詩をよみ、

たゞひとりのだのしみ……

父に、母に

おしわかちあたへたし……。

(9) 寒冷のうちに吹かれながら。

寒い風。

みんな凍る。

あなたの雪やまから

冷い寒しい風がくる。

さつと、

紅をさしたひとぐのほく

りつと。

紅らんだ耳

しんくくと凍える足もと、

醜くも

鼻汁をたらし、

つつと、

鼻がしらに玉をなして、
老いた白人ホーマンは、
苦い寒い面いろに、
ポイーを
よくも、よく使ふてゐる。
あかい火が燃えてゐる。
しかし、
私たちは、
主のもとに働くみ、

ホーマンを恐れ、
疼く寒さに
全身を冷し、痛み
たゞまめに稼ぐのみ
そこにも
寒さと、
そのなかに吹き叫ぶ風は。
おゝ自然の冷さに

おそれ、恨みはたらきうとなれば――

心の静かな海に

妙にうつる、

雪の山、

寒冷に冴える四方の景。

空に

凍つてゐる雲のさまじき

詩に、

歌に、

私のちからは黙すによつて、

お、詩は生れる――

(10) 小唄。

男のなかに

只ひとりの女

蛇のごと、

鋭い瞳と、きはは向けられる。

しかし、

瞳も、牙も見えない不思議！

たど、

移民の男の群る生活のところろに

ひとりの女は

おゝいじらし、可愛い……

(11) 彼女。

夢をみてゐる、

夢に遊ぶ少女よ。

かどやかに、

ほんとに天女のやうにみえる。

あの、

あゝあゝ……

空に向けてゐる明眸。

愛の心に、

虚榮のおもひに
盲ひ、狂ふ妙齡の
したごころか――

――香り、

仄々と、

わが室に薫つて、匂ふ花よ！

青葉のしげみを

おぼふばかりなの花の花……

私は。

春のめばえになやむころ

煩ひの

胸に渦巻く十七の少女よ！

私は、

今夜みた、

おまへのころに

からだに、

うつそみの夢になやみながら

この詩を書いてゐる。

あゝ活動寫眞の少女よ！

(12) さすらぶ私のたましひ。

べとりくと。

解けかけた牡丹雪がふる。

夜のいのちは、

いまにくる。

淋しい灰闇み、

ぬけいでた私のたましい。

涙してイ^たむ。

地の下に

紅い舌がべろくくしてみえる。

ふたりのいのちもつれあふ。

兵士に、

狂ひ盲ひた婦の若さが

そこにある。

キツスする、

牡丹雪のとけてふる

急い冷さも

そこではみられなかつた。

感へてみると、

お、

そこは夜のうち。

闇にふるべとりとした牡丹雪のとけたらしい
雨のうち。

何うして、

脱け出た靈しいか

べそくとはらばふ。

ぬたぐたに

泥濘にぬられながら……

眸は、

うづく

まぶたはうるむ

黄に光る

茶褐色に眼はなげく。

音なく眼にはいつた。

唯、煤煙のかけら――

音なく

なめる牡丹雪のとけた雨の冷さ。

汽車がなる。

淋しいこともない。

冷さも思はれない。

汽車のうちに

私のたましいははや眠むる。

さあちらいとは青い色に、

それでも

銀色に

あめは光つてみえる。

眼の底に

ふたつの流れが沈んだ。

それのに、

二つの流れはかしこにみえる。

見るのが本當のか。

沈んで見えないのがまことか。

島になる。

汽車は走る。

田舎は暗い。

発車したときの町のありさまを思ふと、

ほんとに、賑かで恐しいなげきがあつた。

明るいのでよくわかつた——

より以上、明いうちの暗のうちにうつてゐた——。

あゝ、それを思つてみると、
どんなに田舎は
静かに暗い一つ色であることよ！
淋しい雨の雫がたる窓のもとに、
あゝ田舎のくらしいなかに、
私の霊は汽車ををりてさまよふてたら、
あれ、その窓のもとに、
うるほひにしめる

明眸の。

夢の詩園に遊んでゐる少女がゐる。
たい端坐してゐる——

あい。
それと思はれた幻が、
はやも、雨に濡れながら
哀しい物がたりして、
兵士とふたりいだきながら迷ふてゐる。

女の瞳が、

蚯蚓の雨の夜に光るやうに――

……

……

……

暗のうちにをのしく。

夜の雨の牡丹雪のとける雫のごとく

ふりかゝる。

そのとき、

ふたりは

灰暗い田舎の町にはいつた。

田舎の窓の灯かげが、

ほほつと、

なげいてゐる。

女も、兵士もその灯のかけをみなかつた。

私のたましいは、
何處かにいつた。
……何處に……。

三、 久遠の生。(三篇)

(1) 春の雪

綿花の布いた
羊毛の散つた
山の雪よ！
林の雪よ！
いまは、
陽は照り、

いまは、

茜さす、

灰々ほのぼと紅をさしき

山の面ゆ

雪は香る

ほれぐに、

四方に仰げば、うるむ眸。

いちらしう

雪のひかりに面を羞ゆる……

私は、

ステーションのプラットホームの上の

雪除ねて

恍惚と、

あはれ、

自然をみ、

また、

淋しく自らをみいり

あゝそのちから私の腹に湧く、雪のひかり、
雪のなげき……涙ぐむ瞳のうるみ……

エンジンの

スチームのなるが恐しい。

ひとは急ぐ。

ひとはゆく。

ひとり淋しみ、はたらきうどのなかに
夢をみ、

おし……私は——

いつまでも陶ふて夢になく

雪は光る。

うるむ眼……

(2) つめたい雨が今日もふる。

濡れる。

今日も亦、雨。

冷い／＼雨はふる。

風邪のやうに、

のんどはいたい

頭は疼く。

濡れるのが

いやに氣になつて

ます／＼

疼く頭……

雨のふるうち、

ぬかるみのうちに

青白い顔に

徒に動く唇に、

なげきをためた額には……

あゝ

若い皺がある。

私は鐵道工夫である。

毎日いつも仕事しなくては生活くえない。

いたい喉が

疼く頭が

私のものでないなら……

私は、貧しさと、病いたみとを

濡れながら——雨に。

じつと、みつめ、

茫然とイんでゐる。

冷い雨が、今日もふる。

……
……
……

(3) 過去自嘲。

ごまかし、

あゝ俺のいままでのごまかしが、いぎたなく
その屍をさらし出した。

心をごまかして、

空想の上に咲かした詩の花は、
造花の古りて
埃と塵に汚れたよりもみにくくこころに
俺の心に屍をさらし出した。

なんといふことか、

こひを

愛を、

生きることを、

切感したことはした。
が、弱い意志の俺は
Nothingだ。

風がないのに

静かな白日にさくらの花は散つてゐた。

それはきれいなとも、

なんとも思はれなかつた。

しかし、淋しさはあつたらう。

それにしても、

いまの、若葉が生々としていく。

俺のごまかしは、

ちや

いまはごまかしでは心があちつかなくなつた。
ちやうど、

風のないのに花が散るやうに。

生はいみじい。

生はいしく尊い。

ごまかしは、

をりくのなぐさみにはなつたらうが、

いまはこうして

生きてつゞけてゐるうちに、

そのごまかしは、

いとほしい

みにくい屍となつた。

生きる！
生きてゆけよ！

俺は、

生きる。

俺は、

一生煩悶にうしなふいのちであらうとも生きる。
なんにも出来ない生きもの、屍としてとも生

きる。

生きものとしてはづかしい一生涯に了るとも生
きる。

生きる！

生きる！

いままでのごまかしは屍となつた。
俺のまへには、

生の眞實のみだ。

造花もいらぬ。

文明もいらぬ。

素より虚禮なんぞはいらぬ。

社交もいらぬ。

たゞ

赤ん坊でいし。

生きてゆくのみでいし。

生きてゆくうちに花も咲かう。

實も熟れよう。

それは生きてゆくことによつてのみだ。

その實は

生の終りにしか熟らない。

花は、

生の盛時に只一どきしか咲かない。

凡ての虚榮と。

ごまかしは、

造花の古りたのよりもみにくい屍をさらしてゐる。

實も、

花も、

いきてゆく自然の果と、過程のうちにもいでるのだ。

生きてゆけ！

死をも生でやつつけろ！

おゝ俺は永久に生きる。

永却の生きこそ、

俺のいのちあればだ。

永遠の生きこそ、

俺の神だ。

いや、

俺は神だ。

生きろ！
 生きろ！
 みにくい虚榮とごまかしの屍を曝しつゝ………。
 生きろ！ そこに久遠の神がある。

<p> 大正八年六月一日印刷 大正八年六月一日發行 さすらい 定價金七拾錢 </p>	<p> 著作 仁科雄一 <small>米國、オレゴン州ポートランド 北第四街五十一號</small> 印刷者 澤田文雄 <small>東京府下四區麹町区中環一二六</small> </p>	<p> 發賣所 <small>東京市神田區美土町三番地</small> 株式會社 東京堂書店 <small>東京二七〇番 電話自三〇六六番 神田至三〇六六番</small> </p>
--	--	---

—東京堂發賣—

與謝野晶子著 歌の作りやう 定價九十五錢

與謝野 寬著 詩歌集 鴉と雨 特價七十錢

與謝野晶子著 雜記帳 定價六十五錢

—文藝書類—

187
401

終

